

「雨の日はジョン・レノンと」

関戸哲也

登場人物

男
女

雨がその喫茶店を包むように降っている。
そこはガラガラの喫茶店。男女、一組しかお客さんがいない。
女は気怠そうにストローの袋で何かを作っていたり、外に見える景色を気にしたりしている。

男が一生懸命話をしている。

男 「・・・あのーそうなんだよ、傘、傘をね、忘れていったんだよ。ジョン・レノンが、

その喫茶店にさ。それが火曜日だったんだけどね。あ、この火曜日ってのが後々重要になってくるんだけど。あ、聞いている？」

女 「聞いているよ」

男 「あっホント。それで火曜日だったんだけど、え？ホントに聞いている？」

女 「傘、忘れていったんでしょ？喫茶店に、ジョンレノンが」

男 「そうそう、火曜日にね」

女 「それで？」

男 「あ、うん。それで、その喫茶店のマスターってのが大のジョンレノン好きで、ジュークボックスなんか全部ビートルズの曲でいっぱいになってさ」

女 「あのさ・・・」

男 「なに？」

女 「ホントにあったの？」

男 「は？」

女 「ジュークボックス」

男 「え？」

女 「なに？ジュークボックスって」

男 「あれ、え？知らない？ジュークボックス。こう、こう、さ。ポンポンポンちっちゃい箱みたいなのがさ、こうあって。こっちの方に、レコードとハリが置いてあって、お金入るとガチャンって」

女 「そうじゃないよ。ジュークボックスは知ってるわよ、無いんじゃないの普通、喫茶店にはジュークボックスは？」

男 「は？」

女 「見たことあるの？ジュークボックスが置いてある喫茶店」

男 「えーと」

女 「喫茶店にはないでしょ？大抵」

と男、周りを見渡す。

女 「無いよ。この店には」

男 「違う、違うよ」

女 「何が違うのよ」

男 「喫茶店って言うのがおかしいんだよ」

女 「あなたがそう言ったんじゃないの！」

男 「っていうかこれアメリカの話だからね」

女 「は？」

男 「だからあるんじゃないかな？ホラ、ま、喫茶店って言うか、ね？あるじゃんそういうところ。「ダイナー」とか書いてあるさ」

女 「「ダイナー」って読むのそれ」

男 「……」

女 「言わなかったじゃん。アメリカでの話だって」

男 「うん」

女 「なんで言わないのよ？」

男 「あの、逆に言わないほうがいいかなって」

女 「なに？逆につて？何の逆よ。あーやつぱりイライラする」

男 「大体分かるかなと思って、そういうの。だって、ジョンレノンが行く喫茶店なんだから普通、アメリカかなって思わない？」

女 「思わない」

男 「なんでよ？」

女 「イギリスかも知れないじゃないの」

男 「え？」

女 「だって、ジョンレノンがイギリスの人だよ？アメリカかって決まってるでしょ？」

男 「ちよつと、ズルくないそれ？」

女 「何がズルいのよ」

男 「……アメリカもイギリスも一緒だよ」

女 「違うよ！」

男 「両方とも英語喋ってるじゃん」

女 「何それ？」

男 「こつち目線で言えば一緒だよ」

女 「こつち目線って何よ、もう。言ってる事小学生以下だよ。え？何の話してるのよ、一体！」

男 「君が変な茶々の入れ方するからだよ！だから、ジュークボックスがビートルズでい

つばいになるくらい、ジョンレノンが好きだっという喫茶店のマスターがいて、その人がさ」

女 「(手を挙げて) はい」

男 「はい」

女 「ジョンレノンのファンなんだよね？そのマスター」

男 「そうだよ」

女 「それもおかしいと思うんだけど」

男 「なんで？」

女 「ジュークボックス全部ビートルズの曲なんでしょ？あのね、ビートルズの曲は半分がポールが作ってるんだから、ビートルズの曲っていうのがおかしい。実際、ポールとジョンはいがみ合ってた時期もあるくらいなんだから、ほんとのジョンレノンのファンはそんなことしないよ」

男 「・・・・それはもう、言ってることが当たり屋並だよ」

女 「絶対おかしい」

男 「じゃ、ホントのファンはどうするの？」

女 「ジョンの作った曲だけにするよね。ホントのファンなら」

男 「アレ？アレ？ファンだったっけ？ジョンレノンの？」

女 「なんでよ？」

男 「だってジョンレノンのことジョンって、レノンを抜かすのは相当なファンでしょ」

女 「普通だよ。それにあたしポールの方が好きだし」

男 「普通じゃないよ。だってビリージョエルのことビリーとは言わないじゃん」

女 「ポールって言う時だってあたしマッカーサーニー抜かしてるじゃない」

男 「あ、そうか、やっぱり文字数的に言うとなポールファンって事に」

女 「何言ってるのよ。え、ちよつと待って。何これ？何の話よ一体」

男 「あ、んと、だから、雨の日にジョンレノンがさ。これ、いい話だと思ったんだけど、なんかブツ切りにされちゃってるからさ」

女 「誰に聞いた話よ？」

男 「城ノ内」

女 「またロクでもない人から」

男 「いい奴だよ。代理店で働いてたから、たまにチケット回してくれたり」

女 「それで？途中までは分かったから。ジョンレノンが？傘を忘れて？」

男 「そうそう。傘を忘れて。んで。雨が降ると傘を取りに来るから、マスターは雨の日はジョンレノンを待っててさ」

女 「は？」

男 「なに？」

女 「雨が降ると傘を取りに来るの？」

男 「うん」
女 「ジョンレノンが？」
男 「うん」
女 「何で？」
男 「何でって、だって傘がないと濡れちゃうじゃん。何言ってるのよ？」
女 「そうじゃなくて、なんで雨の日になるとジョンレノンが取りに来るって分かるの？
その傘を？もう取りに来ないかも知れないじゃない」
男 「それは取りに来るよ。ヨーコから貰った大事な傘なんだよ」
女 「なんでマスターにそのことが分かるのよ？なんで取りにくるって分かるのよ？ジョンからは何にも聞いてなかった訳でしょ？だいたいが何で雨の日なのよ？」
男 「……それは、言ったんだよ。ジョンが！」
女 「いつよ?!いつ」「ヨーコから貰った大事な傘だから雨の日に取りに行くよ」って言ったのよ!」
男 「ジョンが傘忘れた時だよ！」
女 「忘れた時には、その喫茶店にはいないわけでしょう?!」
男 「は？」
女 「傘忘れたって気がついた時には喫茶店から出てっちゃってるわけじゃない。いつ言えるのよ？」
男 「言いに来たんだよ。後から、ジョンが！」
女 「なんて言いにきたのよ?!」
男 「だから（左手をのれんをかき分けるようにあげて）傘忘れたけど、今度、雨が降ったら取りにくるよって」
女 「………持つて行きなさいよ?!?!?!」
男 「は？」
女 「だから傘っ!」
男 「持つてはいけないよ」
女 「なんでよ?!」
男 「話おかしくなっちゃうじゃない」
女 「なんで?今いるじゃない!」
男 「今いる?!誰が？」
女 「ジョンが!」
男 「は？」
女 「今いるでしょ!ジョンレノンがさっ!」
男 「（辺りを見回しながら）え?!嘘!？」
女 「違っ!もうバカっ!」
男 「なにになに?」

女 「そんな時だつて！」

男 「そんな時つて？」

女 「だからジョンがその喫茶店に傘忘れたつて言いに来た時！なんでその時傘渡さないのよ！？それから何その手？」

男 「は？」

女 「赤ちようちん？ねえ赤ちようちんなのそこは？」

男 「・・・アメリカに赤ちようちんはくない？」

女 「あなたが（手を）こうするから赤ちようちんに見えるつて話をしてるんですけど！」

男 「ちよつと何を言ってるのか雲をつかむみたいな話になつちやつてる」

女 「だから！「傘忘れた」つて言いに来たんだつたら、そんな時に渡しなさいよ。その忘れた傘をさつ！」

男 「え？」

女 「渡せるでしょ？そんな時に傘！」

男、実際に自分で傘を持って入つて来る場面をやつてみて。

男 「・・・ああ」

女 「ああじゃないよ」

男 「（軽く）じゃ、来てないや」

女 「じやつてなによ腹立つな、なんでそんな風に軽く（返せるのよ）」

男 「だからジョンはね」

女 「ね、ね、ね、ね、ジョンレノンのファンなの？もうさつきから、ずっとジョン・ジ

ョン・ジョン・ジョン言つとりますけど？！」

男 「・・・僕はジョージファンだから」

女 「なんだよこいつ」

女、後ろを向いて「あーっ！」と怒りを発散する。

男 「はあー。なんか、全然伝わらないや」

女 「誰から聞いた話なんだつけ？」

男 「（水を飲もうとするも無い。が、一応口に当ててみる）」

女 「聞いている？」

男 「聞いているよ。だから城ノ内だよ」

女 「ロクでもない。代理店やめたんでしょう？いま、何してるんだつけ？」

男 「色々あつて今は千葉で仏像彫りやつてる」

女 「何それ？何者？怖いよ」

男 「その前は車で「殴られ屋」やってた」
女 「もういいよ。城ノ内の話は」
男 「あつれー。なんでもうまく伝わらないのかなー（また水を飲もうとするも無い。が、一応口に当ててみる）レノンファンならわかるはずだと思っただけだな」
女 「（つぶやくように）ジョンじゃねえのかよ。呼び方統一しろよ」

しばし間。

女 「あー。イライラする」

男 「何が？」

女 「今の」

男 「今のって？」

女 「呼べばいいでしょ、マスター」

男 「は？」

女 「飲みたいんでしょう？水」

男 「いや」

女 「飲みたいのよ。なのに、何で呼ばないのよ。呼べばいいじゃない」

男 「飲みたくないよ」

女 「いっつもそうだよね。なにそれ？当てこすりなの？おまえが呼べよって意味？」

男 「違う違う、マスター呼ぶほど水、欲しいわけじゃないから」

女 「（厨房に）すいませーん！！」

男 「だから、ゴメン。呼ばなくていいから。やめてよね」

女 「（さらに大きく）すいませーん！！！！何、マスターすぐどっか行っちゃうじゃない」

男 「（ちよつと笑って）コーヒーでも飲みに行ってるのかな」

女 「バカじゃないの？」

間

女 「あのさ、やっぱり無理だよ」

男 「（よく聞こえておらず。または聞こえてないフリをして）なんかひどいよねこの店。お客さんホッポリ出してどっか行っちゃうなんてホント、信じられないよね。いくら常連とはいえさ」

女 「無理なんだって」

男 「そういう経営姿勢って言うのはさ、あ、経営姿勢ってこんな店に経営もクソもないか」

女 「ちゃんと聞いてっば！もう無理なんだって」
男 「・・・・・・どうしたの？急に？」
女 「急じゃないんだって。少しも急じゃないんだって」

立ち上がる二人。
間。

再び、いすに座り直すと3年前。付き合った当時の2人になる。
笑い合う男と女。

男 「いいでしょう？この店？僕、好きで良く来るんだけど」
女 「うん。すごい。この趣のある感じって言うの？たまらないよね」
男 「あ、良かった。ダサいって言われたらどうしようかと思った」
女 「大好きこういう店」
男 「これ、良かったらどう？」

といって、男、ポケットからチケットを取り出す。

女 「え？なに？」
男 「タミオのチケット」
女 「(口に両手を当てて喜ぶ)」
男 「城ノ内って奴から貰ったんだよ。好きだといいいんだけど」
女 「城ノ内さんって代理店の？」
男 「いや、今はハリガネアートに目覚めてエッフェル塔作ってる」
女 「なにそれ?!すごいね。その人！」
男 「あ、んでチケットなんだけど。どう？タミオ？」
女 「嬉しいっ！ねえ、なんで？なんで？私がタミオ好きだってわかったの？」
男 「・・・・以心伝心ってヤツかな」
女 「すごい(笑い)」
男 「ハハハ。喜んでもらえたんなら良かった」

と、言っって空のコップを口に当てる。

女 「フフフ」
男 「なに？」
女 「よくやるよねそれ」
男 「え？」

女 「空のコップを口に持っていくの」
男 「そう？あ、やめたほうがいい？」
女 「ううん。その仕草ね。あたし好き。可愛い」
男 「やめてよ」
女 「あー。照れてる？」
男 「嬉しそうに）そんなんじゃないよ」
女 「ねえ、あたしたちっていつまでこうやって楽しくやっていけるのかな」

笑いあう二人。音楽。椅子に座りなおす二人。（元の時間に戻って）

女 「もう無理だから！」
男 「……」
女 「無理なんだって！」
男 「何が無理なの？あの、説明してくれなきゃ分からないでしょう！？」
女 「あたしもう耐えられないんだって！」
男 「あのさ、あのさ。こういう風に考えてみようよ。今日って日があるじゃない？今こうして現に過ごしている間は、大事な時間なだけでさ、いざ、死ぬ時？にはさ、決して思い出さない一日になる。たいがいの日々って言うのはそんなもんだよ。そんな日々の連続が、きつと、「生きていく」って事になるんじゃないのかな」

男、満足そうにコップを口に持っていく。

女 「……え？ゴメン。なに？何言ってるの？言い切った感出してんだけど、何よ今の？」
男 「つまりさ、全然、こう、大きさに捉える必要はないって事」
女 「全然つまりになってないんだけど。私がなに？なにを大きさに捉えてるっていうのよ！」
男 「落ち着きなよ。そんな、大きな声出して」

間
二人、座り直して、女が下を向いている。（時間が飛ぶ）

男 「落ち着きなよ。きつと大丈夫だから」
女 「おかしいよね。猫がいなくなっただけで。でもね、悲しいのはどうしようもないの」
男 「そう」
女 「悲しいな」

男 「・・・うん」

女 「あ」

男 「ん？」

女 「悲しいって口に出して言ったの初めて。なんか、変だね」

男 「そう？」

女 「うん。普通言わないもんだよ。私は悲しいなんて」

男 「そっか」

女 「うん」

男 「良かった」

女 「何が？」

男 「ちよつと、元気になった」

女 「そうかな」

「ニヤア」と声がする。

男 「(外を見て) あれ？今の・・・」

と、女、窓から外を見る。

女 「あ！「ニヤンノ助」だっ！ホラ、あそこ！たまにここ連れてきたりしてたから、覚えてたんだよ！」

男 「(外みて) ああ・・・ホントだ。良かった良かった、良かったね」

女 「捕まえてきて」

男 「(一度女見て、再び外を見て) 良かった良かった、良かったね」

女 「ね、ね、捕まえてきて」

男 「え？僕が？」

女 「他に誰がいるのよ？あ、ホラ、逃げちやう逃げちやう！」

女、男を行かせようと押す。

男 「あのさ、僕、言ってなかったんだけどさ猫アレルギーなんだよね」

女 「・・・考えられない」

二人、座り直して。男、女に対して頭を下げている。(時間が飛ぶ)

女 「・・・考えられない！！！」

男 「えーと。その（苦笑い）なんと言ったらいいか・・・」

女 「浮気してすいません」以外あるの？」

男 「ハハハ」

女 「何で笑ってるの？ぶっ飛ばすよ」

男 「あ、いや、あれはさ、浮気って言うかさ、なんていうんだろうね。そのー。ここが難しいところになるんだけど、男女間においての、お互いの認識の仕方みたいなものがさ」

女 「入れたら浮気だけど」

男 「ハハハハ」

女 「入れたの？」

男 「いや、入れたとか入れてないとかじゃなくて、哲学的に言うとき、男女のそもそもの存在っていうのは一体何かって話になってきてさ・・・」

女 「入れたの?!」

男 「入れたいうか入れてないって言うか、ここが男女関係の微妙なところなんだけど、ま、ま、あえて入れたか入れてないかって言えば、若干？入れちゃったかなーぐらい」

女、ビンタ。

男 「すいません」

女 「考えられない!」

男 「あの、ホントごめん」

女 「謝るつもりあるの？」

男 「あるある」

女 「今度、浮気したらね、私、城ノ内と寝るから」

男 「それはヒドくない？」

女 「城ノ内、どこににいるの？」

男 「今はモロッコ」

女 「なんでよ?!」

男 「遺跡発掘」

女 「（大声で）だから何者なんだよ!?どんな友達関係だよ?!」

男 「（回りを気にして）声が大きいから・・・」

間。

座り直して（元の時間に戻る）

男 「大きい声出さ(ないでよね)」
女 「(厨房に向かつて) すいませーん!!--!!--水だつてばっ!」
男 「だから大声出さないでつて!迷惑だよっ!」
女 「何が迷惑なの!? 誰に迷惑なの? お客もマスターも誰一人居ないじゃないの! なんであたしが声の大きさを気にしないといけないわけ?」
男 「どこ行ったのかな?」

と男、歩いて、厨房のほうに行こうとする。

女 「(ので)どこ行くのよ」
男 「探してくる。水欲しいんでしょう?」
女 「欲しいのあんたでしょう?」
男 「水でも飲んで気を落ち着かせないと話がどんどんおかしな方に行っちゃうよ」
女 「どう転んでも、あんたを振る話をしてるんだけど」
男 「マジなの? (手ぶらで帰ってくる)」
女 「(ので) 持って来いよ水!」
男 「いや、いいから本当に?」
女 「何聞いてたのよ今まで。ついていけないのよ」
男 「・・・分かった。これだけ聞いて。さっきのジョンレノンの話んだけどさ、すつごくいい話なんだよ」
女 「もう!」
男 「お願いお願い!」
女 「どこまで聞いたつけ?」
男 「話し始めようとして」 そんなでね・・・」
女 「ちよつと待ってよ。どこまで聞いたつけ?」
男 「だから、その喫茶店に来たジョンレノンがさ、えーと、なんだつけ?あれ?違うんだよいい話なんだよ。おかしいな」
女 「その話さ・・・」
男 「ちよつと待って今思い出すから。ああダメだ、なんでかフレディマーキュリーの顔が浮かんでは消え浮かんでは消え」
女 「その話さ」
男 「だからちよつと待ってつて!」
女 「誰から聞いたの?」
男 「え?だから城ノ内だつて」
女 「違うよ」
男 「何言ってるんだよ。城ノ内だよ」

女 「そんな訳の分からない奴がそんな話知ってる訳無いでしょ！」
男 「じゃ、誰から聞いたって言うんだよ」

間。女、悲しそうにじっと男を見て。

男 「……………(考えて) え? ……あれ?」

座りなおす二人。(時間が飛ぶ)
長い間があつて。

男 「そっか、大変なんだ。実家」

女 「……………うん」

男 「黙ったまま水を飲む」

女 「薄く笑つて」

男 「なに?」

女 「ううん」

男 「気になるよ。なに?」

女 「気まづくなるとそれやるよね」

男 「それって?」

女 「空のコップを口に持っていくの」

男 「そうかな?」

女 「そうだよ」

男 「気が付かなかつたな」

間。

女 「最低」

男 「え? ……何が? 僕?」

女 「それだけ?」

男 「え?」

女 「そっか、大変なんだ。実家」だけ?」

男 「……………だけ?」

女 「大変だよ。実家。お父さん倒れちゃって、誰かがお父さん見てあげないといけないから、そうなるよあたししかないでしょう? ってことは、仕事も家も引き払って実家に帰らないといけなくなるの。仕事もだよ。今度のプロジェクトだってチーフの声もかかっていたのに、それ全部捨てて実家に帰らないといけなんだよ。それな

男 「のに「そっか、大変なんだ。実家」だけ？」

女 「・・・なんて言っつていいか分からないよ」

男 「分からないの!？」

女 「そんな、そんな事言われてもどうしたらいいの？」

男 「知るわけ無いじゃない! 悩んでるのあたしの方なんだから!」

女 「怒るなって! こっちだって仕事忙しくて大変なんだからさ! 忙しいのはね、自分だけじゃないんだよ!」

男 「パソコン相手に一日中カチャカチャやってるだけじゃないの! こっちはね、生きて人間相手なんだからね!」

女 「あー。あー言う。そういうこと言っちゃう。ほー。ずいぶん偉いんですね、コンサルタントって言うのは」

男 「お願いだからそういう言い方やめてくれない!？」

女 「また始めるの? ねえ、また始めるの? どっちがしんどい思いしてるか対決」

男 「ちよっと待ってよ。そういうこと言い始めるのほとんど、あなたのほうからでしょう?! この前、映画に行こうとした時だってそうだよ」

女 「なんでその話になるのよ?! 映画のときは映画のときで話終わってる訳じゃない!？」

男 「じゃ、そんな時に言いなよ!」

女 「あの時話、聞かなかったじゃない!？」

男 「聞いたよ!？ 僕ちゃんと話聞いてるって」

女 「聞いてない」

男 などと男と女。ヒートアップする。

音楽「F・I」。

二人、ロパクエアで口論する感じになる。

男はずっと女と口論をロパクでしているのだが、女、ゆっくり客席のほうを向いて、嬉しそうにしゃべり始める。

女 「ニューヨークのバーでの話しただけだね。ジョンレノンが大好きなバーのマスターがいて、店中、ジョンレノン一色だったのね。入り口にある、ジュークボックスも全部ジョンレノンの曲で。そんな時、たまたまレコーディングを終えたジョンレノンが、ジョンレノン本人がよ、その店に一人で来たの。マスターはとっても嬉しかったんだけど、プライベートを邪魔しちゃいけないって、話しかけずにいたのね。でも、ジョンはジョンでジュークボックスを見たりして。全部自分の曲だからそれ見て物思いにふけったりして。そういうしてるうちに雨が降ってきて。」こちそう

様、帰るよ」ってジョンが帰ろうとしたもんだからマスターはちよつとたまらなくなつて「すみませんがジョンレノンさんですよ。ずつとファンだったんです！雨降ってますから、濡れてしまいます。この傘、使ってください」って傘を差し出したのね。そしたら「ありがとう。今度、雨が降った日にこの傘差し返して来るよ」って言ったの。……その、数日後。ジョンレノンは狂信的なファンの凶弾に倒れたの。それ以来、そのバーには、こんな張り紙が張られるようになったの。「火曜日は定休日。しかし、雨の日は営業します」……。あたしが、あなたにこの話教えてあげたんだよ」

いつの間にか、男も女の話の話を聞いている。

男 「……そうだったっけ？」

女 「結局、あたしの話何ひとつ聞いてなかったんだよ。あ、ゴメンね。こんな事言つて。でも、本当のことだもんね」

男 「そっか。何で忘れてたんだろう、君が教えてくれたって」

女 「いいよ、もう。行くね、あたし」

男 「ちよつと待ってよ」

男、椅子に立てかけてあつた傘を女に差出し

男 「これ、持って行ってよ」

女 「(笑つて)冗談でしょ？あたし、自分の持つてるから」

男 「自分の持つてもいいから」

女 「あなた濡れちゃうじゃない」

男 「いいから」

女 「一番大事なのはね」

男 「うん」

女 「あたし雨の日になつても、返しにこないよ」

男 「そっか」

女 「うん」

男 「それでもいいから」

女、傘を持って出て行く。

雨の音大きく。

男、しばらくボウっとしているが、腰にエプロンを巻き、机の上の食器を片付ける。机の上に「三年後」と書かれた札を置く。それをひっくり返すと「予約席」の文字。

「カランコロン」とドアの開閉音。

男 「ぐらっしやぐら」

ジョン・レノン 「STARTING OVER」が高らかに鳴り響く中、ゆっくり、暗くなっている。

幕